

677
2016年
12月発行

よろこびの泉

きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
新約聖書 ルカ2:11



聖夜 ~ holy night ~

発行所 奈良県生駒市門前町七一四〇 日本ミッシェン
〒630-0266 電話〇七四三(七三)一七五四 振替口座〇〇九三〇二六六四二番

発行人フアベイ・D
編集人日本ミッシェン編集部

印刷所 埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
〒350-0303 新生宣教師印刷部
電話〇四九(二九六)〇七二七

一年分 送料共 九〇〇円
定価 一部 一八円

親と子のしあわせ

386

私が本当のクリスマスの意味を知ったのは小学三年生の時です。長靴のお菓子が欲しくてねだったこと、その頃主流のバタークリームケーキを、母が「半額になった」と言って買ってきてくれたこと等を覚えていいます。

我が家は、経済的に厳しい家でしたから、プレゼントの話をする友だちをうらやましく思ったこともありましたが、そして心はねたみと寂しさでいっぱいでした。そんな時に教会に誘われ、教会がどんなところかも知らないまま、誘われた喜びで教会へ行きました。そこで救い主イエスキリストの誕生を祝うのがクリスマスだと知ったのです。それからの私の人生は変わりました。今三人の子どもの母親になりました。我が家は、毎年家族一同のプレゼントが廊下に置かれていて、クリスマスの朝子どもたちが歓声を上げ「お父さんのはこれ。お母さんはこれ。うちは大人にもプレゼントがあるんだね。〇〇ちゃんの家は、子どもにしかないんだって」と言っていました。子どものもと主人への

プレゼントは私が用意し、私のは主人が用意します。みんなが寝静まってから、廊下に置くのは主人です。

昨年は、子どもたちのプレゼントしか用意していませんでした。しかし朝になったら、私や主人へのプレゼントがあつてびっくりしました。誰が置いたのか…。図書カードでした。嬉しかったです。私や主人の知らないことを知っていたかはわかりません。そう言えば、いつも「もううだけのクリスマスではなく、ささげるクリスマス、誰かを喜ばせるクリスマスにしよう」と言っていて、アパートに住んでいたときは、サントの服を着て「メリークリスマス」と言いながらクッキーを配りました。楽しい思い出です。

イエスキリストがお生まれになったクリスマス、感謝するとともに誰かとの喜びを分かち合えたら素晴らしいと思います。

「主は富んでおられたのに、あなたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」(Ⅱコリント 8:9)

(相原 幸紀美)

*この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。



問 わが家では毎年一二月になると子どもたちにもせがまれてクリスマスツリーを飾ります。もみの木一杯に赤、黄、青色に点滅する電飾を張り巡らすとても喜びます。あの電飾にはどういう意味があるのですか。

答 クリスマスのイメージ。それは暗い夜に明るく輝く光ですね。教会ではクリスマスまでの4週間をアドヴェント(待降節)と言い、その時からツリーを立て、窓に電飾を付けたり、教会のドアにクリスマスリースを掛けたりして建物を飾ります。そのようにしてイエスキリストの誕生を祝う準備をします。それは、イエスキリストの誕生を告げたヨハネが「すべての人を照らすそのまことの光が世に来よう」としていた。「ヨハネ1:9」と語っているからです。私たちに必要なのは太陽の光、夜の町を照らすイルミネーションだけではなく、心の内を照らす光が必要なのです。体は健康でお金は充分持っているのに、心に光を持っていないために、生きる事に失望している人がいます。それに反して、体は病でベッドに縛られているのに、明るく喜びに輝いて日々を送っている人もいます。

筆者の私自身も、キリストを知らなかつた時、心は闇でした。お金も無い所へ病気になる、数年の入院を告げられた時には生きる気が失い絶望しました。そんな私でしたが、イエスキリストを知り、この方を信じて心に迎え入れた時、私の内でキリストが光となり、希望に輝く者に変えて下さったのです。以来数十年喜びの人生を歩んでいます。

(児玉 博之)

知っていますか

水野源三

知っていますか
ほんとうですか

明るい蛍光灯も
暖かなストーブも
やわらかなベビーベッドもない
馬小屋のかいばおけに
寝かされていた方が
私達の救い主だと

知っていますか
ほんとうですか

瞬きの詩人・水野源三第二詩集

「主にまかせよ 汝が身を」より

(氏は小学四年の時、赤痢による高熱から脳性小児麻痺になり、全身の機能を失う。唯一残された目の瞬きにより詩を作られた。)

真実の神を求めて〜エホバの証人よりキリストへ〜

兵庫県西宮市 菅原 義久

イエス・キリストに出会うまでの私は、自分の人生が恵まれない惨めなものであると心底思っていました。当時の私には、希望なるものは何一つありませんでした。そんな私に声をかけてくれたのがエホバの証人です。

私は一九六八年五月に北海道広尾町に生まれました。母が一歳半の時に病で他界し、その後家族は離れ離れとなり、私は親類の家で過ごすこととなります。

中学3年の時、長年離れて暮らしていた父親が旭川市に家を購入した事により、私は片田舎の広尾町から旭川に引っ越ししました。しかし、旭川市に引っ越したものの、父親は出稼ぎ労働者で、結果、私一人が旭川市に残されました。

寂しい高校生

中学を卒業後、高校は定時制を選び、昼間は働き夜に学校で学ぶという生活を四年間続けました。その高校在学中のこと、市内を走るバスの中で声を掛けてきた相手が、エホバの証人(ものみの塔聖書冊子協会)でした。働きながら学ぶ私を、相手は奇特に思ったのか、宗教に全く興味のなかった私に積極的かつ執拗に接触してきました。その余りの熱心さに、私も次第に心を許し「話だけでも」と思い、聖書研究会(この聖書研究会は、聖書ではなく、週一時間位、家で彼ら組織が出している書籍を学ぶこと)を始めました。勿論直ぐに彼らの教えを受け入れることはあり

ませんでした。高校卒業後上京して就職したものの、暫くしてその生活の中で対人関係に悩み、また将来への漠然とした不安に苛まれ、僅か一年で北海道に戻ったことで再び聖書研究会が始まりました。

エホバの証人に

暫くして、私はエホバの証人の組織の中でバプテスマを受け、正式にエホバの証人の一人となりました。この時、私がものみの塔を選んだ理由は、彼らが強調している終末論によって、「エホバの証人しか救われない(終末を生き残る)」ということを感じてしまったからです。今振り返ってみますと、実に自己中心的な思いでした。当時の私は現世に対して不満(身勝手なことではありませんが)があり、この世界を壊して新たに良い社会に作り変えてくれるなら……これは私にとって非常に魅力的であると感じたのです。

湧き起った疑念

ところがそのような中で、自らが所属していた「ものみの塔」が紛い物であることを知ることになりました。その理由の一つは、「事件簿」という一冊の本を読んだことです。その本の中に「ものみの塔」の一つの群れである北海道・広島会衆で起こった大量排斥事件のことが記されていました。本来なら、小さき者の声に耳を傾けるのが真の神・真の組織であるはずなのに、その勤めを果たしていないということを知って「ものみの塔」に甚だしく幻滅しました。それで、当時エホバの証人問題で最も取り組みのあった、西舞子バプテスト教会(神戸)に接触して、「ものみの塔」に関する思いを

手紙にして書き送ったところ、同教会から直ちに返事が届き、ものみの塔が異端(異なったキリスト教)であると正して下さったのです。また私は当時、北海道に在住しておられた元広島会衆の代表(金沢司氏)にも会ってインタビューさせて頂き、一層「ものみの塔」に対する疑念が確かなものになりました。

本当の救いを

その後、神戸の教会の勧めもあり、旭川市内のキリスト教会(単立旭川聖書バプテスト教会)に行くようになり、一九九一年「ものみの塔」に断絶届けを提出して去りました。それから、同キリスト教会に身を置き、本母清一牧師より、聖書が私に真に伝えたいことが何であるかを学びました。それは、自分自身が真の神様から離れていた罪人であること。そのことを認めて悔い改めるべきこと。イエス・キリストが私のために身代わりとなって死んでくださったこと、この犠牲とキリストの復活を信じたものは救われていることなど。これらのことを私は心から信じました。以来今日に至るまで、本当の喜びと真の平安は私の心の中に湧き溢れています。

一九九三年六月十三日、本母清一師により石狩川にて洗礼を受けました。

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、あなたがたの救われたのは、ただ恵みによるのです。」(エペソ2・4〜5)

その喜びに満たされて、翌年九月神戸市にある関西単立バプテスト神学校に入学し、一九九七年六月卒業。二〇〇〇年四月世界福音伝道団(現..

世界福音伝道団)に入団、翌年より栗東キリスト教会(滋賀県)で十年間牧会させて頂き、それと共に、他の教会の先生方と協力し合ってラジオの福音放送伝道にも関わり、ライフ・ラインというテレビ番組放送のためにもお手伝いをさせて頂きました。これは、私にとってこの上ない喜びでした。

人生の転換の喜びへ

私の人生、振り返りますと、キリストを信じる前は、自らの人生が恵まれず惨めなもの残念なものであると心底思っていました。少なくとも当時の私には、希望なるものは何一つなく、しあわせだと思つた経験がありませんでした。しかし、キリストを信じてからは、もの見方が180度変わりました。キリストを信じたら経済的に豊かになったとか、或いは出世したとか、そんなことは全くありませんが、神様の目線が常にどこに向けられているかを知って嬉しくなり元気づけられています。「わたしの目には高価で尊い。わたしはあなたを



『愛を追い求めなご。』「シンシア」4:1